

総務企画消防委員会行政視察報告書

会派名 新生・市民クラブ

氏名 大塚正俊

日 程	令和2年1月30日（木）午前9時30分～12時
場 所	日南市国際交流センター小村記念館
相手方	日南市観光・スポーツ課 高橋課長、観光係 海老原主査 総合戦略課釋迦郡（しゃかこり）課長補佐、金丸地域イノベーションリーダー
参加議員氏名	大塚正俊、松葉民雄、草野修一、荒木ひろ子、恒賀眞太郎、中西伸之、木ノ下素信、三重野玉江
目的	飫肥城下町の町並み保存と観光振興に向けた取り組み及び飫肥のまち再興プロジェクトの取り組みについて現地調査を行い、中津市の観光振興に活かすことを目的とする。
内 容	<p>1. 日南市の概要</p> <p>日南市は、宮崎県南部に位置する市。九州の小京都と称される飫肥（おび）や風光明媚な日南海岸国定公園などを抱える、歴史と自然あふれる観光の街である。 行政面積 536.11 km²、総人口 51,106 人 （2019年10月1日）</p> <p>2. 現地調査の概要</p> <p>（1）飫肥城下町の現状と課題</p> <p>飫肥城下町は、天正16年（1588）から明治初期までの280年間飫肥藩・伊東氏5万1千石の城下町として栄えたところです。武家屋敷を象徴する門構え、風情ある石垣、漆喰塀が残る町並みは、昭和52年に重要伝統的建造物群保存地区に選定されています。</p> <p>昭和53年に復元された大手門を中心に、松尾の丸や藩校振徳堂、伊東家の歴史を綴る貴重な資料が展示されている飫肥城歴史資料館があります。また、商人町通りには樽を店頭に置いた商家や、格子に壁燈籠、番傘を飾った商家が軒を連ね、町を流れる堀割の清流など、江戸時代を彷彿とさせる町並みが楽しめます。</p> <p>日南市の観光客数は年間190万人前後で、宿泊者数は約17万人となっています。飫肥城周辺の観光客数は約20万人、有料施設の入館者数は約5万人で、年々減少傾向にあります。</p> <p>民間団体の実施する「食べあるき町あるきマップ（あゆみちゃんマップ）」が城下町への回遊性を促進し、滞在時間延長に寄与しています。しかし、体験型観光のメニューが乏しく、滞在時間の更なる延長や宿泊観光の促進が課題となっています。</p>

また、市所有の歴史的観光施設の老朽化が進んでおり、その維持管理や改修費用が今後の市の財政を圧迫していくことを危惧しています。

現在、飫肥城に由来のある施設の利活用及び維持管理について、関係機関と意見交換や情報共有を行っています。

(2) 飫肥のまち再興プロジェクト

飫肥商店会と民間事業者の連携体を事業主体として、商店会の活性化と新たな観光消費の創出を図る事業を展開しています。飫肥への観光客のほとんどが日帰り観光であることを踏まえ、飫肥を訪れた観光客の長期滞在を促すため、古民家を改修した宿を整備するとともに、宿泊客等にまちを周遊してもらうため、商店会の店舗や商品の情報が載ったガイドカードの作成や商店会内の店舗で購入できる地域食材を活用した料理のレシピ本を作成することで、魅力ある飫肥のまちづくりを実践しています。

また、野外ライブイベントと連携して文化財を活用したアートや食のイベントを実施し、新たに獲得した観光客が、また訪れたいと思う魅力的な取り組みを継続して観光客の増加を図っています。

これらの事業を円滑に推進するため、飫肥のまちづくりに携わる関係者で、共通の認識持ちながら、コンセプトとして「皆が同じ方向を見て、プロジェクトの成果を確実に上げ、飫肥の財産をみがく」を掲げ、飫肥のまちが一丸となった連携体制を構築し、魅力あるまちづくりを展開しています。

これらの取り組みにより、飫肥を訪れた観光客の長期滞在を促すとともに、インバウンド観光客などの新たな観光需要の取り組みにも寄与し、あわせて、観光客の満足度向上による再訪意向を向上させることで、観光客数の増加を図り、地域経済の活性化を目指すことを目的としています。

市では、民間事業者と連携して、空き家の再生プロジェクトを推進しています。まちに残る貴重な空き家を活用し、トータルで利活用の仕組み構築をする「飫肥地区まちなみ再生コーディネーター」を募集し、26件の応募からプレゼンテーションや面接・選考会を経て徳永 煌季さんが選ばれ、2015年8月に着任しています。

最初に手掛けたのは、城下町に残る2つの物件のリノベーションでした。庭園が県の指定名勝にもなっている勝目邸（市所有）と、江戸時代まで歴史を遡れる武家の長屋門の名残がある合屋邸（個人所有）をどちらも一棟貸しの宿泊施設として再生しています。2棟ともまちなみ再生コーディネーターの徳永さんが所属するKiraku Japan 合同会社が事業主体となり、資金調達を実施し2016年11月より着工して、2017年春にはオープンさせました。

	<p>また、空き家をコーディネーターとして個人に紹介し、飲食機能をもつ場所として再生するなど、空き家の再生計画や売買契約の交渉等を進めながら活用を進めています。</p> <p>このまちのもつポテンシャルに惹かれて古民家を再生しサテライトオフィスとして活用している映像制作や Web 制作、EC などのサイトを手掛ける株式会社プラスディーもその一つです。</p> <p>古い建物を活用して、観光資源として有効に使うなど新たなビジネスを呼び込むだけでなく、地元とのさまざまな連携もひとつのポイントであるとのことです。</p> <p>「ギャラリーこだま」は、明治時代の薬問屋であった「小玉家」を改装して、子孫の方々がギャラリー兼お食事処を営んでいます。お食事処では、観光客向けのランチ営業はもちろん、最近では新しくできた宿泊施設のお客様限定で地元食材を使った朝食の提供も始めています。</p> <p>一方、保存はできずに解体される空き家では、使える部材等は再利用できるようにし、地域おこし協力隊では次のまちづくりのための新たな人材を募り、飫肥地区全体の活性化を継続できるように模索しているとのことです。</p>
<p>成 果</p>	<p>中津市も飫肥城下町と同様に自然や街並み・景観に対する評価は比較的高いものの、体験、アクティビティに対する評価が低く、滞在時間が短いことが観光客満足度の低下を招いていると考えます。</p> <p>そこで、昨今のインバウンド需要等にも対応した体験プログラムの構築や、宿泊施設の整備などで滞在時間の延長を促し、まちの魅力を高めることによって、中津への観光入込客数を増加させることが必要と考えます。</p> <p>また、宿泊型観光を推進するため官民が連携して、城下町エリアや旧下毛に残る古民家再生による宿泊施設の整備や農家民泊施設の整備・誘導を推進する必要があると考えます。その際、行政や個人だけではその古民家再生の資金確保や運営を手掛けることが困難なため、「飫肥地区まちなみ再生コーディネーター」制度が参考となると考えます。</p>